びわこの考湖学

—第3部—

28

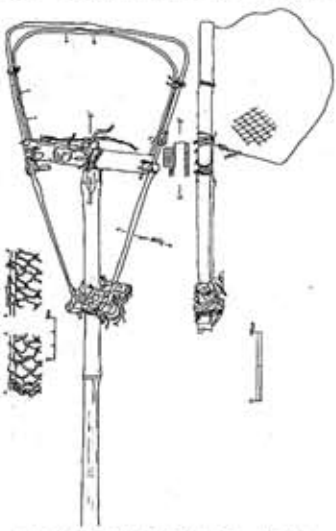
琵琶湖が生み出した資源

藻・泥

平成21年10月に滋賀県を襲った台風18号は、琵琶湖に思わぬ被害をもたらしました。台風の風波により、湖岸に打ち上げられた大量の藻です。この藻の始末のために、多くの労力と経費が費やされました。このような状況は、かつての琵琶湖にはあり得ないことでした。琵琶湖に藻が生えていなかったわけではありません。昭和30年代ごろまでは、琵琶湖や内湖、そして水路に生える藻や、水底にたまった泥は、水田の大切な肥料として、農家の人たちが争って採取していたからです。

稲は、連作が可能な作物ですから、同じ水田で何回も栽培することができます。しかし、連作を続ければ、どうしても地力が落ちてきます。安定した収穫を確保するためには、毎年水田に肥料を入れ続けなければなりません。現在は、肥料をお金で買うことができますが、昔は、肥料も自分で調達しなければなりませんでした。この肥料として活用されてきたのが、山間部にあっては山の下草や灌木類。そして湖岸に近いところにあっては、先に紹介した藻や泥だったのです。

藻を採る季節は、春先と秋でした。春の終わりから夏にかけては、藻場は魚の産卵場所になるため、採取は禁止されていました。大中ノ湖で行われていた藻、泥採りの様子を紹介しましょう。朝、4時か5時に起きると、すぐに食事を済ませ、小昼（10時頃に食べる間食）と昼飯の弁当2つを持って船を出します。藻の場合は、船1杯にして1日1往復、泥の場合は2、3往復するのが一人前の男の基準でした。ただし、午後になると風波がひどくなり、せっかく採った藻や泥を船ごとひっくり返してしまうおそれがあるので、1時過ぎには帰らなければなりません。採った藻や泥を水田に入れ終わる頃には、日が沈みかけています。体がふらふらになる重労働だったそうです。これをシーズン中は毎日繰り返します。



藻をかきとる道具「ゴミカキ」。田舟に乗って藻をかきとるため、柄の長さは湖底に届くよう3～4㍍ある

水田に藻や泥を入れ続けると、当然水田の土が増えて田面が高くなります。こうなると水田に水が入らなくなってしまいます。そこで、水田の肥えた土を一旦はねて、下の基盤土を除去し、田面を下げる作業が行われました。近江八幡周辺では、この除去した基盤土が「八幡瓦」の原料として再利用されていました。陸から流れ出た養分を吸って藻が育ち、この藻が水田の養分となり、一部はまた琵琶湖に流れ、藻に育つ。さらには、藻が瓦の原料となる。見事な物質循環のサイクルが機能していました。

ですから、台風で打ち上げられた藻は、宝の山だったでしょう。いや、そもそも、湖底の藻はほとんど採り尽くされ、湖岸に打ち上げられることはなかったのでしょう。藻や泥も琵琶湖が産み出した資源であり、この資源を使うことにより、きれいな琵琶湖が維持されていたのです。

（滋賀県立安土城考古博物館　大沼芳幸）